

フランス文の語順

加藤 宏 幸

私は、1980年に発表した論文「フランス語の明瞭性と調和——語順の重要性——」¹⁾において、具体的な例に基づいてフランス文の語順を検討し、その規則を次のようにまとめた。①文末はもっとも重要な位置であり、もっとも重要な語または語群によって占められる。②文頭は文末に次ぐ重要な位置であり、重要な語または語群によって占められる。③文末に位置する語または語群は、十分な音量を持っていなければならない。④動詞は、その前後に位置する要素を結合するので、文の中心に位置する。⑤文末の動詞は、十分な意味内容を持つものでなければならない。⑥文は思考の流れに沿って書かれ、話されなければならない。⑦同格形容詞には一定の位置がない。ここでは、これらの規則を踏まえて、さらに深くフランス文の語順を深究してみたい。

フランス文は、構造上から見て、五つに分類される²⁾。①主語—自動詞：Les élèves chantent [生徒が歌を歌う]。②主語—他動詞—直接（間接）目的補語：Il regarde la télévision [彼はテレビを見る]（直接目的補語）。Je pense à mes parents [私は両親のことを考える]（間接目的補語）。③主語—他動詞—直接目的補語—第二目的補語³⁾：Je prête de l'argent à mon ami [私は友達にお金を貸す]。④主語—動詞—主語の属詞：Elle est jeune [彼女は若い]。⑤主語—他動詞—直接目的補語—直接目的補語の属詞：Je trouve ce livre intéressant [私はこの本をおもしろいと思う]。多くのフランス文は、主語、動詞などの主要な要素が、形容詞的または副詞的要素によって修

飾されて複雑になっているが、基本的には五つのパターンのいずれかに属する。

フランス文のこの五つのパターンは、そのままフランス文の基本的語順と見なすことができる。一般に文はこれらの語順に従って構成されるが、主体の思考の流れに従って形成されたり、文の調和・強調などの文体上の理由を考慮して形成されるため、基本的語順に従わない場合がある。ここでは特に、基本的語順に従わない文に注目し、なぜそのような文が形成されるのかを調べてみたい。

1. まず、シャトーブリアン Chateaubriand の『ルネ』*René* に現れる次の文に注目しよう： *Le jour, je m'égarais sur de grandes bruyères terminées par des forêts. Qu'il fallait peu de chose à ma rêverie! Une feuille sèche que le vent chassait devant moi, une cabane dont la fumée s'élevait dans la cime dépouillée des arbres, la mousse qui tremblait au souffle du nord sur le tronc d'un chêne, une roche écartée, un étang désert où le jonc flétri murmurait! Le clocher solitaire s'élevant au loin dans la vallée a souvent attiré mes regards; souvent j'ai suivi des yeux les oiseaux de passage qui volaient au-dessus de ma tête. Je me figurais les bords ignorés, les climats lointains où ils se rendent; j'aurais voulu être sur leurs ailes* [その日私は、森の外れの丈の高いヒースを踏み締めてさ迷っていた。夢想には、ほんの取るに足らぬ物で十分であった！ 風が私の前から吹き払う一枚の枯葉、その煙が木々の葉のない梢に立ち上る小屋、樫の幹の上で北風に震えている苔、遠く離れた岩、しおれた燈心草がざわめいている池！ 遠くの谷にそびえ立つただ一本の鐘楼が、しばしば私の目を引いた。私は、頭上を飛んで行く渡り鳥を目で追った。私は、鳥が向かって行く未知の岸や遠い土地を想像した。私は、鳥の翼に跨りたかった]。

声を上げて読んでみればよく分かるが、この一節は、よどみなく流れる川の水のように自然に流れていて、読む者に抵抗を全く感じさせない。それは、主語—動詞、主語—動詞—直接目的補語の基本的語順に従っているからであ

り、状況補語も文頭、文末、文中と、各文においてもっともふさわしい位置を占めているからである。

2. 一般に状況補語は、文中においてかなり自由な位置をとり得る。主としてその位置は、文の調和・強調など、文体上の理由によって決定される：*Bientôt mon ami viendra me voir* [間もなく友達が私に会いに来るだろう]。*Mon ami, bientôt, viendra me voir. Mon ami viendra bientôt me voir. Mon ami viendra me voir bientôt.* この四つの文を文の調和の観点から見ると、第1の文が、文のほぼ真ん中に動詞が位置し、さらに *bientôt* が文頭に来て、文の構成も自然であり、もっとも調和のとれた文となっている。自由な位置をとり得る状況補語は、文体上から見れば、動詞との関連においてその位置を決定し、動詞が文のほぼ中心に位置するように配置すれば、調和のとれた文が形成される。*Il y a des roses dans le jardin* [庭にばらがある]。よりは、*Dans le jardin, il y a des roses.*の方が調和のとれた文である。次の文においても、動詞は文のほぼ中心に位置し、動詞を中心として左右のバランスがとれている：*Assis près de la fenêtre, dans son grand fauteuil, il lisait du matin au soir (France)* [窓のそばの大きな肘掛け椅子に座り、彼は朝から晩まで本を読んでいた]。*Comme une barque qui passe la digue, il (=avion) entra dans les eaux réservées (Saint-Exupéry)* [防波堤を越える小舟のように、飛行機は貯えられた水の中に入って行った]。

3. 動詞は本来、その前後に位置する要素を結合するので、文の中心に位置する。したがって、動詞が文頭や文末に現れる文は不自然である。動詞が文頭に来る *Venait Paul* [ポールがやって来た]。という文は、動作よりも主語に力点がおかれたそれ自体独自の意味を持つ文であるが、動詞が文頭にあるため、文体的には調和のとれない文である。文体的な観点に立って、*Ici venait Paul* [ポールがここにやって来た]。と書き改めれば、調和のとれた文となる。また、動詞が文末に来る *Paul venait.* も、文体的には調和のとれない文である。*Paul venait ici.* または *Paul venait me voir.* と書き改めれ

ば、文体上は均整のとれた文となる。

文末に動詞が来るのを避けるために、非人称の *il* がしばしば用いられる：
Un accident est arrivé [事故が起こった]. → *Il est arrivé un accident*. *Une bonne idée me vient* [いい考えが浮かんだ]. → *Il me vient une bonne idée*. *La peur le prit* [彼は恐怖に襲われた]. → *Il lui prit une peur*. — *Il le prit une peur*. という文は存在しない。また、意味上の主語 *peur* に不定冠詞が付くことに注意しなければならない。

また、主語名詞の補語を文末に分離し、動詞を文のほぼ中央にすえることができる：*L'envie de voyager lui prend* [彼は旅に出たくなる]. → *L'envie lui prend de voyager*. *L'idée d'aller au cinéma lui est venue* [彼は映画に行く気になった]. → *L'idée lui est venue d'aller au cinéma*.

4. 動詞がほぼ文の中央に位置している文は、安定性があり、自然な感じを与える。しかしながら、動詞に十分な意味を持たせるため、文の調和を考慮せず、動詞を文末に置くことがある：*Sur la route du retour, dans le calme de l'après-midi gelé, des cris d'oiseaux ou des appels d'enfants montaient* (Beaumelou) [帰り道で、凍りつくように寒い午後の静寂の中に、鳥の鳴き声と子供の叫び声が上がった]. — 長い主語を文末に置けば安定した文になるであろう。しかし作者は、動詞 *montaient* を文末に置き、鳥の鳴き声や子供の叫び声よりも、それらが「静寂を破って突然上がったこと」を強調しようとした。*Il était là, dans son grand manteau, lorsqu'un extraordinaire petit jeune homme sortit* (Beaumelou) [彼が大きな外套にくるまって、そこに留まっていた時、背の低い奇妙な青年が出て来た]. — 従属節の長い主語を倒置すれば安定した文になるであろう。しかし、動詞 *sortit* が文末に置かれたことによって、背の低い奇妙な青年よりも、その青年が「突然現れたこと」が強調される。*La porte au vent palpite* (白水社『仏和大辞典』) [扉が風でがたがた震える]. — 文末に動詞 *palpite* が置かれたことによって、「がたがたという震え音」がはっきり聞きとれる。

5. 基本的語順においては動詞の前に置かれる主語名詞が、到置されて文末に来ると一般に強調される：Mais la voix se perdait dans le bruit du vol, seuls communiquaient *les sourires* (Saint-Exupéry) [その声は飛行の音で消され、微笑だけが伝わって来た]。——操縦士と無線通信士の乗った飛行機が嵐に巻き込まれて、海上に流され、彼らはもはや地上に帰還できなくなり、雲の中をさ迷っている。飛行機を上昇させ嵐の上に出た時、そこは日が降り注ぐ世界であった。操縦士が振り向いて無線通信士を見た時、無線通信士は「よくなって来た」と叫ぶが、その声は爆音で消され、微笑だけが伝わって来る。*sourires* が文末に置かれたことによって、「微笑で輝く無線通信士の顔」がわれわれの目の前に浮かび出る。Depuis son unique tentative de suicide à Argelouse, même aux heures de désespoir, avait joué en elle, toujours vivace, *l'instinct de conservation* (Mauriac) [アルジュルーズでのただ一度の自殺未遂以来、絶望している時でさえも、彼女の中では、いつも活発に自己保存の本能が働いていた]。——状況補語—状況補語—動詞—状況補語—同格形容詞と続き、やっと主語が現れる。われわれは主語が現れるまで不安な状態に置かれ、主語が現れてやっと安心する。それ故われわれは、彼女の「自己保存の本能の強さ」を感じとることができる。De l'inspiration tragique, ses œuvres les plus fortes rassemblent les éléments majeurs : la pureté schématique, la densité, le sens de la fatalité; constamment pèsent sur le drame *les forces sombres du destin* (Castex) [彼のもっとも力強い作品には、悲劇作品の主要な要素が寄せ集められている：図式的な純粹さ、高い密度、宿命に対する感覚。絶えずその演劇の上に、運命の暗い力が重くのしかかる]。——文末に主語 *les forces sombres du destin* が置かれたことによって、その劇作家の演劇を支配する「運命の暗い力」をはっきりと感じとることができる。

また、感覚動詞の直接目的補語で、不定法の意味上の主語となる名詞が、文末に置かれ強調されることがある：Vers cinq heures le lendemain matin, un bruit de roues m'éveilla et m'attira à la fenêtre, et je vis s'avancer jusqu'à notre porte *une voiture à deux chevaux* (Green) [翌朝5時ごろ、

車輪の音で私は目を覚まし、窓に引き寄せられた。われわれの家の門まで、二頭立ての馬車が進んで来るのを見た]。——une voiture à deux chevaux が文末に位置しているため、車輪の音を響かせて進んで来る「二頭立ての馬車」が目に見え浮く。Tout à coup elle vit paraître auprès de son lit *la clarté d'une lumière* (Stendhal) [突然彼女は、ベッドのそばに照明の明かりが現れるのを見た]。——文末に位置した *la clarté d'une lumière* によって、暗い部屋のベッドのそばに突然現れ、彼女をびっくりさせる「照明の明かり」を感じとることができる。

6. 文は主体の思考の流れに沿って、書かれ話される。一般に思考は、主題の提示、その説明という順序をとる。主題は文頭に提示され、その後その説明が行われるので、何が主題となるかによって、基本的語順は、文体上許容される範囲内でかえられる。

次の文に注目しよう：*De cette crise, chacun de nous est plus ou moins victime, mais chacun est également responsable à son niveau* (Logos Bordas) [われわれのおのおのが、多かれ少なかれこの危機の犠牲者であるが、その程度において皆等しくこの危機に責任がある]。——この文を単一の文と考えれば、Chacun de nous est plus ou moins victime *de cette crise*, mais chacun *en* est également responsable à son niveau. と書き換えることができるが、この文以前に危機の内容が語られ、それに続いてこの文が現れたのであれば、上のよう書き換えることはできない。*Sur l'autre rive* débutent les beaux quartiers (Aragon) [他の河岸に美しい街が登場する]。——基本的語順に従えば、Les beaux quartiers débutent *sur l'autre rive*. となるが、一方の河岸にある街について語った後で、他の河岸にある街について語ろうとする場合には、当然「他の河岸」は文の主題となるので、*sur l'autre rive* は文頭に置かなければならない。

フローベール Flaubert の『ボヴァリー夫人』*Madame Bovary* の次の一節に特に注目したい：*La façade de briques était juste à l'alignement de la rue, ou de la route plutôt. Derrière la porte se trouvaient accrochés un*

manteau à petit collet, une bride, une casquette de cuir noir, et, *dans un coin*, à terre, une paire de housseaux encore couverts de boue sèche. *A droite* était la salle, c'est-à-dire l'appartement où l'on mangeait et où l'on se tenait. Un papier jaune-serin, relevé dans le haut par une guirlande de fleurs pâles, tremblait tout entier sur sa toile mal tendue; des rideaux de calicot blanc, bordés d'un galon rouge, s'entre-croisaient le long des fenêtres, et *sur l'étroit chambranle de la cheminée* resplendissait une pendule à tête d'Hippocrate, entre deux flambeaux d'argent plaqué, sous des globes de forme ovale. *De l'autre côté du corridor* était le cabinet de Charles, petite pièce de six pas de large environ, avec une table, trois chaises et un fauteuil de bureau (Flaubert) [れんが造りの家の正面は、街路、正確には街道にきっちり沿っていた。ドアの後ろには、小ケープ付きのコート、馬勒、黒革のハンチングが掛けてあり、隅の床には、乾いた泥がまだ一杯ついている一對の脚絆が置いてあった。右手に広間があったが、それは食事をしたりくつろいだりする部屋であった。上部が青白い花の飾りで派手に飾られたカナリヤ色の一枚の壁紙全体が、ぴったりと張られていない下地の布の上で震えていた。赤い飾り紐で縁取りされた白いキャラコのカーテンが、窓に沿って交差し、暖炉の狭い前飾りの上に、ヒポクラテスの顔を付けた置き時計が、卵形のガラスケースに入った、銀めっきされた2個の燭台に挟まれて輝いていた。廊下の反対側には、シャルルの診察室があったが、幅がおよそ6歩の小さな部屋で、テーブル1台、椅子3脚、事務用脇掛け椅子が置かれていた]。——実家のある村で結婚式と祝宴を終え、シャルル Charles の妻となったエンマ Emma は、初めてシャルルの家に入った。彼女は、家の様子を見て回る。彼女の視線の動きに従って、文が書かれている。主題である場所がまず提示され、つづいて彼女が目留めた物が提示される。「ドアの後ろに」、彼女は「小ケープ付きのコート」と「馬勒」と「黒革のハンチング」を、「隅の床に」、「一對の脚絆」を見る。つづいて「右手に」、「広間」を、広間の中に「カナリヤ色の壁紙」と「白いキャラコのカーテン」を、「暖炉の狭い前飾りの上に」、「ヒポクラテスの顔を付けた置き時計」を認める。

つづいて「廊下の反対側に」、「シャルルの診察室」を、そこに「テーブル1台」と「椅子3脚」と「事務用脇掛け椅子」を認める。この一節においては、エンマの視線の動きによって、各文の語順が決定されて行く。

7. On a visité *le château somptueux* d'un homme riche [ある金持ちの豪華な邸宅を見物した]. という文に関して、*le château somptueux* を強調するために、それを文末に持って来て、On a visité d'un homme riche *le château somptueux*.と書き換えると、不自然な文となる。緊密に結びついている名詞+de+名詞が分離するからである。しかしながら、分離しても不自然な文とならず、形容詞に修飾された文末名詞が十分な意味を持つ文を見出すことができる：Je gade de cette rencontre *un souvenir délicieux* [私は、あの出会いの楽しい思い出を持ちつづけている]. —形容詞によって修飾された直接目的補語が文末に来て、「思い出の楽しさが」強調される。*un souvenir délicieux de cette rencontre* の結合から解放された *de cette rencontre* は、状況補語的な働きをするようになり、動詞により一層強く結び付くようになる。On faisait de la force *un emploi continuel* (Mansion) [いつも暴力に訴えた]. —*un emploi continuel de la force*の語順が一般的であるが、*un emploi continuel*が文末に来て、「暴力使用の繰り返し」が強調される。*de la force* は、動詞の方により強く引き付けられる。Homme d'esprit, railleur jusqu'à la cruauté, il a laissé de ses contemporains *des portraits d'une grande pénétration* (*Le Petit Robert* 2) [才人で、非情なまでに冷やかしく好きであった彼は、彼の同時代人についての非常に洞察に富むポルトレを残した]. —*des portraits d'une grande pénétration* が文末に来て、「ポルトレが示す豊かな洞察」が強調される。やはり、*de ses contemporains* は、*des portraits* との結び付きより動詞との結びつきが強い。

本来かたく結合されている名詞+de+名詞から、de+名詞を分離することは不自然に思えるが、第1名詞に付加された形容詞に十分な意味を持たせるためには、この語順を選ばざるを得ない。

Je me suis senti *de l'inclination* pour elle [私は彼女に愛情を感じた]。という文において、pour elle は、de l'inclination を修飾する形容詞的要素と見なすことができる。この文を書き改めて、Je me suis senti pour elle *de l'inclination*。とすれば、pour elle は動詞を修飾する状況補語と見なすことができるであろう。しかし、この文は何か不自然な感じがする。Je me suis senti pour elle *de l'inclination la plus tendre* [私は彼女にもっとも深い愛情を感じた]。とすれば、文末に位置する要素が十分な音量を持つようになり、調和のとれた文となる。Je ne me suis nullement proposé de fournir des renseignements par avance à ceux qui feront sur moi *des notices ou des articles* (Renan) [私は、私に関する紹介記事や論文を書くであろう人たちに、あらかじめ情報を提供するつもりは全くなかった]。—— qui feront *des notices ou des articles* sur moi とすることは可能であるが、音量の不十分な sur moi を文末に持って来れば、不調和な文になってしまう。

8. 同格形容詞の語順について考えてみたい。一般に、同格形容詞には定まった位置がない：Le vent soufflait *violent* [風が激しく吹いていた]。*Violent*, le vent soufflait. Le vent, *violent*, soufflait. その位置は、文の調和・強調などの文体上の理由によって決定されることが多い。

Seuls, s'élevant du niveau de la plaine et comme perdus en rase campagne, montaient vers le ciel les deux clochers de Martinville (Proust) [ただ2本、平野の水平面からそびえ立ち、平坦な平野に迷い込んだかのように、空に向かってマルタンヴィルの鐘楼が伸びていた]。——主語の同格形容詞 *seuls* は文頭に孤立し、広い平坦な平野にそびえる鐘楼が「ただ2本」であることを強調する。他の位置ではなく、文頭に置かれたことによって、その効力を十二分に発揮する。—— D'abord, la vibration de chaque cloche monte *droite, pure* et pour ainsi dire *isolée* des autres, dans le ciel splendide du matin (Hugo) [まず最初は、それぞれの鐘の振動音は、まっすぐに、純粋に、いわば他の音から孤立して、朝の光に満ちた空に昇って行く]。—— *droite, pure, isolée* は主語の同格形容詞ではあるが、動詞 *monte*

とも結び付き、状況補語的な働きもしている。—— Il le trouve tout habillé sur son lit, les mains croisées sous la tête, *mélancolique* (Deschodt) [彼は、きちんと服を着て、顔の下で手を組み合わせ、憂うつな顔をしている彼を見つける]。—— 直接目的補語の同格形容詞 *mélancolique* が文末に置かれ、「憂うつな顔」が浮かび出る。Dans *Huis clos*, au contraire, il parvient à animer ses personnage, malgré le caractère fantastique de la donnée, et à nous rendre *poignant* leur désespoir (Castex) [これに反して、『出口なし』において彼は、素材の架空的性質にもかかわらず、その人物たちに生命を与え、彼らの悲痛な絶望をわれわれに描き出すことに成功する]。—— leur désespoir *poignant* という表現はとらず、*poignant* が直接目的補語 leur désespoir の同格形容詞として表現されているため、「絶望の悲痛さ」を強く感じとることができる。

9. 主語の倒置について考えてみたい。Le jour où il partira en France viendra bientôt [彼がフランスへ出発する日が間もなく来る]。という文は、文頭の主語が文末の状況補語よりも長い。一般に、文頭に長い主語が現れる文は、不調和な文と見なされる。主語を倒置して、Bientôt viendra le jour où il partira en France. とすれば、安定性のある文となる。

Mon frère et ma sœur entrent dans la chambre [弟と妹が部屋に入ってくる]。という文も、Dans la chambre entrent mon frère et ma sœur. という文も、動詞が文の中心に位置しているので、調和のとれた文である。しかし、Dans la chambre, mon frère et ma sœur entrent. という文は、文末に動詞が来るので、不調和な文である。また、フランス文においては、補語と動詞を可能な限り接近させる傾向があるが、この文においては、状況補語 dans la chambre と動詞 entrent が主語によって引き離されてしまっているのです、不自然な感じを与える。

補語と動詞を接近させるために、従節においては、しばしば主語名詞の倒置が行われる：L'hôtel où demeure mon ami est près d'ici [友達が滞在しているホテルはこの近くです]。C'est la raison pour laquelle n'est pas

venu *mon ami* [これが、友達が来なかった理由です]。La jeune fille dont parle *ma mère* viendra bientôt chez moi [母が話している若い娘が、間もなく家に来るだろう]。Un ciel terne pèse sur ce triste paysage que ne relève *l'éclat d'aucune végétation* (Green) [どんよりした空が、植物の輝きが全く認められない物悲しい風景の上に、重くのしかかっている]。D'un seul coup, je reconnus, d'après les descriptions que m'avait faites *le grand Meaulnes*, le fiancé du domaine inconnu (Beaumelou) [すぐに私は、モーヌの大將が詳しく語ってくれていたので、彼が見知らぬ土地のフィアンセであると分かった]。

従節においては、le livre que m'a donné *mon ami* [友達がくれた本] も le livre que *mon ami* m'a donné も可能であるが、主語名詞を到着しない場合、従属の終わりに être, avoir が来る時には、必ず到置しなければならない：Et avec cette confiance et ce besoin d'amitié qu'ont *les enfants*, la veille d'une grande fête, ils le prennent chacun par la main (Beaumelou) [そして、大きな祝宴の前日に子供たちが抱くあの信頼の気持と友情を求めたくなる気持から、彼らはそれぞれ彼の手を取る]。que *les enfants* ont とすることはできない。

10. *Qui a fait cela?* [誰がそれをしたのですか] という問いに対しては、C'est *Pierre* [ピエールです]。と答えるのが普通であるが、C'est *Pierre* qui a fait cela [ピエールがそれをしました]。と答えることもできる。*Quand est-il venu ici?* [いつ彼は来たのですか] という問いに対しては、Il est venu *hier soir* [昨晚来ました]。または C'est *hier soir* qu'il est venu. と答えることができる。答えの第1の文においては、もっとも重要な要素である *Pierre*, *hier soir* が文末に位置している。C'est...qui (que) の構文を用いて、もっとも重要な要素を文末から移動させて形成されたのが、答えの第2の文である。c'est...qui (que) の構文を用いれば、もっとも重要な要素が明確になる利点はあるが、本来文末に位置すべき要素を強制的に文頭近くに移動させるので、少し不自然な文となるように思える。しかしながら、次のような文において

は、*c'est...que* の使用はきわめて自然である： M. de Lessay habitait le second étage d'une vieille maison de l'avenue de l'Observatoire, dont la façade de plâtre ornée de bustes antiques, et le grand jardin sauvage furent les premières images qui s'imprimèrent dans les yeux d'enfant ; et, sans doute, lorsque viendra le jour inévitable, elles se glisseront les dernières sous mes paupières appesanties. Car *c'est* dans cette maison *que* je suis né ; *c'est* dans ce jardin *que* j'appris, en jouant, à sentir et à connaître quelques parcelles de ce vieil univers (France) [レッセ氏は、天文台通りの古い家の3階に住んでいた。古代人の胸像で飾られた漆喰の正面と荒涼とした大きな庭は、子供の私の目に刻み込まれた最初のイメージであった。おそらく、避け得ない日が来る時には、そのイメージは、重くなった私の臉に最後に忍び込んで来るだろう。なぜなら、この家で私は生まれたのであり、この庭で私は、遊びながら、この古い世界のいくつかの小部分を感じることと知ることを学んだのであるから]。 Cette dignité-là n'est nullement dans les Grecs, et *c'est* à cause de cette dignité, qui nous glace aujourd'hui, *que* Racine a été romantique (Stendhal) [この威厳は全くギリシア人にはない。今日われわれをすくませるこの威厳の故に、ラシーヌはロマン主義者であった]。

以上10項目にわたって、フランス文の語順について述べて来たが、まとめれば次のようになる。

文は主体の思考の流れに沿って書かれ話されるのであるから、その語順は、その流れによって必然的に決定されてしまう。単独の文としてはいくつかの語順をとり得ても、その文が文脈の中に現れた場合には、多くの場合ただ一つの語順しかとり得ない。文脈の中に配置された文は、他の文と有機的なつながりを持っており、その語順は他の文との関係において自然に決定される。文脈の中で、一つ一つの文が他の文と有機的につながっている時、その文は調和のとれた文とすることができる。単一の文としては調和のとれた文であっても、それが文脈の中に現れた場合には、不調和な文となることもある。

ある文が調和のとれた文であるか否かについては、文脈の中で、その文が他の文と調和しているかどうかによって判断されなければならない。

文脈の中であって、語順の異なるいくつかの文のどれが現れても、他の文と有機的につながる場合がある。この場合には、文の調和・強調などの文体上の理由を考慮して、もっとも適切な文が選ばれる。

注

- 1) 加藤宏幸著「フランス文の明瞭性と調和——語順の重要性——」(岩手大学人文社会科学部紀要『アルテス・リベラレス』第26号, 1980年)。
- 2) 朝倉季雄著『フランス文法事典』, 白水社, 1955年, 272 ページ。
- 3) 第二目的補語は、付与の補語 *complément d'attribution* と称され、状況補語に加えられることがある(同上書, 105 ページ)。

主 要 参 考 書 目

- 1) 朝倉季雄著『フランス文法事典』, 白水社, 1955年。
- 2) 泉邦寿著『フランス語を考える20章——意味の世界——』, 白水社, 1978年。
- 3) 川本茂雄編『フランス語統辞法』, 白水社, 1982年。
- 4) マンション(J・E)著(田辺貞之助訳)『現代フランス文法』, 大修館書店, 1976年。

(筆者 岩手大学人文社会科学部教授)